

学校図書館の利活用が「学びの力」の育成に及ぼす効果

- 授業における図書資料の活用を通して -

生涯学習推進センター 長期研修員 小金澤 陽子

1 主題設定の理由

今日、情報化、国際化、科学技術の進展など社会の多方面で様々な変化が進んでいる。今後、人々の生活様式や価値観が一層多様化するものと予想される。こうした状況を踏まえ、学校教育においては、子供が生涯にわたって、心豊かに主体的、創造的に生きていくことができる資質や能力の育成が求められている。「第2次静岡県生涯学習推進計画」では、学校を「生涯学習機関」として「子どもたちが学ぶ意欲や学び方等を含めた基礎・基本を培う場」と明確に規定している。このような現状から、子供が課題意識を持ち、主体的に課題を解決する力を培う必要性を感じた。そこで、本研究では、学ぶ意欲や課題を解決する力を「学びの力」ととらえ、生涯学習社会を生きる子供に培いたい力と考えた。

「学びの力」をはぐくむ方法の一つとして、学校図書館の利活用が有効であると考え。学校図書館は、学習指導要領や「読解力向上プログラム」において、調べる学習活動の場として、また、様々な文章や資料を読む場として、積極的な利活用が求められている。特に、近年、学習情報センターとしての役割は重要性を増し、司書教諭が中心となりながら推進が図られている。また、PISA調査(2003)の結果を受け、テキストから必要な情報を取り出し活用したりしていく力をはぐくむ必要性が指摘されている。資料を活用する力は、課題を解決する力を育成する上で、欠くことのできないものである。

そこで、学校図書館の利活用の中でも、特に図書資料の活用に視点を当て、子供の学ぶ意欲の向上や課題解決の力の育成を図りたいと考えた。図書資料そのものの持つ多くの情報を学び取らせることは、学ぶ意欲の喚起が期待できる。それとともに、子供自身が必要に応じて図書資料を活用できるようになることは、課題に対して自主的、主体的に解決を図ろうとする力につながる。子供の実態や教科の特性に沿って図書資料を効果的に活用することを通して、子供たちに「学びの力」をはぐくむことを目指して本主題を設定した。

2 研究仮説

教師が学校図書館を授業の中で計画的に利活用し、図書資料を教科等のねらいと関連付けて意図的に活用することより、子供が情報を収集したり活用したりする力の高まりや学習内容の深まりや広まりにつながり、子供の学ぶ意欲や課題解決の力が向上する。

3 研究の方法

- (1) 「学びの力」を高めるための手だてについて考察する。
- (2) 授業における学校図書館利活用状況と子供の図書資料活用の現状を把握する。
- (3) 図書資料を活用した検証授業を実施する。
- (4) 図書資料の活用が「学びの力」の育成に及ぼす効果について検証する。

4 研究の内容

(1) 「学びの力」を高めるための手だて

ア 「学びの力」の高まり

「第2次静岡県生涯学習推進計画」では、生涯学習とは「自己の充実や生活の向上のため、各人が自発的意志に基づき、必要に応じて、自らに適した手段・方法を選び、生涯を通じて行う学習活動の全てを表した概念」としている。生涯学習社会では、自発的意志に基づき、自らに適した手段や方法を選ぶ力が必要である。自発的意志は、学ぶ意欲につながるものである。課題解決の過程の中で、子供が新しいことに興味を持ち、疑問に思っていることについて解決を図ろうとすること、また、学んだことを次の学習や生活の中に活用することが重要である。意欲に含まれる性質として、下山剛氏は「積極性・能動性」「内発性」「価値志向性」を挙げている（注1）。これらの性質に照らすと、図書資料は学習の動機付けとしての活用や学習意欲が内発したときの手段としての活用が考えられる。

学校図書館メディアは、図書資料、視聴覚資料などの各種メディアをもって構成する。図書資料は、学校図書館メディアの中心となるものである（資料1）。子供は、情報を収集する方法を知ることによって、必要に応じて各種メディアを使い分けることができるようになる。図書資料を活用した課題解決の力は、別の課題解決の場において、適切な「手段・方法」を選ぶ一方法となる。

様々な課題解決を通して、子供は情報の収集の仕方や活用の仕方を学ぶとともに、活動自体を通して新しい事象への興味・関心を高めるものとする。そして、それらが他の学習や生活の中に生かされることで、また次への意欲につながる。その繰り返しにより、さらに「学びの力」を高めていく。

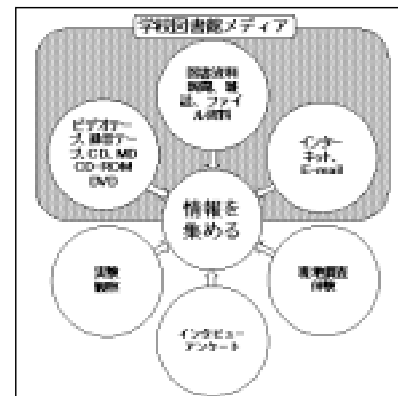
イ 学ぶ意欲を高めるための手だて

学ぶ意欲を高める具体的な場面は、大きく「学習への動機付け」「主体的な課題解決」「学習結果の活用」ととらえられる。

まず、「学習への動機付け」の場面では、子供が学習への興味・関心を高めるとともに、学習目標を把握し目的意識を持つことを目指す。そこで、子供に新しいものや出会わせたり、身近なものへの見方を変えたりするような図書資料を活用して知的好奇心を喚起することが大切である。また、問題意識を持たせるような図書資料を活用することで、学習の価値や必要性を実感させることも考えられる。

次に、「主体的な課題解決」の場面では、身に付けた力を子供が自発的に使えるこ

【資料1】情報収集における
図書資料の位置付け



注) 文部科学省「新しい時代に対応した学校図書館の施設・環境づくり～知と心のメディアセンターとして」、文教施設協会、2001年を参考に筆者が作成。

とを目指す。つまり、子供自身が情報源を選択し、判断し、修正を加えながら、適切な情報源を見付け出し、課題解決に生かしていく実践的な力の育成を図ることが重要である。そこで、学校図書館の利活用の仕方や図書資料を使った調べ方など学校図書館を利活用する際に必要な個々のスキル（本研究では、図書館スキルとする）を身に付けさせるだけでなく、教科等においては、課題設定から活用に至るまでの課題解決のプロセスに沿った実践的な指導を行う必要がある。また、実態を把握して、繰り返し指導を行うことが重要である。そして、身に付けた力を必要に応じて組み合わせながら課題解決をしたり、解決が図られない場合には、別の方法を試みながら、課題に合った情報源を選択したりすることができるように促していくことが大切である。

さらに、「学習結果の活用」の場面では、子供が学習したことの価値を自覚したり、生活への結び付きを知ったりして、次への意欲となることを目指す。知識や技能を実生活で活用する力に着目した先行研究では、教材の位置付けの一つとして「単元の終わりに、発展学習として、学習内容と現実社会のつながりを図った教材開発、リアルワールドに近づく授業の環境構成を行う」を挙げている（注2）。そこで、学習結果を活用するためには、学習と生活を結び付ける教材が必要と考える。実物に触れたり実体験をしたりすることが望ましいが、時間的な制約がある場合や具体物の用意が困難な抽象的な概念の学習の場合もある。そのような場合、学習内容を補足したり発展させたりする図書資料を紹介したり、これらを活用して書かれている内容について考える時間を設けたりすることも効果的である。

ウ 課題解決の力を身に付けるための「学び方」の指導

課題解決の力を身に付けるためには、図書館スキルの指導を含めた「学び方」の指導を発達段階に応じて行うことが重要である。また、課題解決は教科等の内容に沿って行われることが多いため、教科等のねらいへの配慮とともに、指導する教員の共通理解を図るうえで、指導の押さえを示す必要がある。袖ヶ浦市のように、具体的な指導内容を「学び方ガイド」として冊子にまとめ、課題解決のプロセスに合わせて活用できるように工夫している地域もある。

そこで、全国学校図書館協議会から示された「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」を参考に、教科等との関連と学校や地域の指導の実態を考慮して、学習指導要領と所属地域

【資料2】学校図書館利活用指導の押さえ

	1-3年	4-6年	7-9年
課題設定	○学習課題を設定する。	○学習課題を設定し、適切な情報源の活用を図る。	○設定した学習課題について、適切な情報源を見付け出し、課題解決を図る。
学習計画	○学習課題を設定し、適切な情報源を見付け出す。	○個人やグループで学習計画を立て、活動を進めさせる。	○学習過程や情報源の活用について見直しを行う。
利用の仕方	○教科書資料の活用を学び、授業で行って理解する。 ・教科書資料の活用 ・教科書の活用 ・教科書の活用	○教科書資料の活用を学び、進んで理解する。 ・教科書資料の活用 ・教科書の活用 ・教科書の活用	○教科書資料の活用を学び、自分なりに理解する。 ・教科書資料の活用 ・教科書の活用 ・教科書の活用
調べ方	○教科書の活用を学び、進んで理解する。 ・教科書の活用	○教科書の活用を学び、進んで理解する。 ・教科書の活用 ・教科書の活用 ・教科書の活用	○教科書の活用を学び、目的に応じて使う。 ・教科書の活用 ・教科書の活用 ・教科書の活用
調べ方	○適切な資料を見付け出す。	○適切な資料を見付け出す。	○適切な資料を見付け出し、適切な方法で活用する。
まとめ	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる
活用	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる
学習指導要領との関係	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる	○学習の成果が揃ってまとめる。 ・まとめる ・まとめる ・まとめる

の教科書を基に「学校図書館利活用指導の押さえ」を作成した（資料2）。授業での学校図書館の利活用の際には、「学校図書館利活用指導の押さえ」を考慮に入れ、適切な図書資料を用意したり、図書館スキルを指導したりするなどの手だてを講じることが重要である。

(2) 授業における学校図書館利活用と子供の図書資料活用の現状

ア 授業における学校図書館利活用の現状

授業における学校図書館利活用の現状を把握するために、所属地域内小学校40校の司書教諭または学校図書館担当者を対象に、平成19年4月1日～7月20日の期間において、学校図書館を利活用した時間数について、学年・教科別にアンケート調査を実施した（資料3）。ここでいう学校図書館の利活用は、授業における図書資料の活用に限定した。（実施時期は、平成19年7月。回答率は100%）

学校図書館を利活用する時間数は、学年が上がるに従って増加し、特に第2学年から第3学年への増加率は2倍以上である。このことから、発達段階に応じて、子供が主体的な活用の仕方ができるように、段階的に指導をする必要性を感じる。

【資料3】学年別・教科別学校図書館利活用時間数

学年別（時間）													
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計						
時間数	194	191	451	386	513	545	2280						
教科別（時間）													
教科等	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	特活	総合	計
時間数	964	223	0	118	87	2	92	6	2	5	42	739	2280

注）平成19年4月1日～7月20日の期間中、授業において学校図書館を利活用した40校（522学級）の延べ時間数

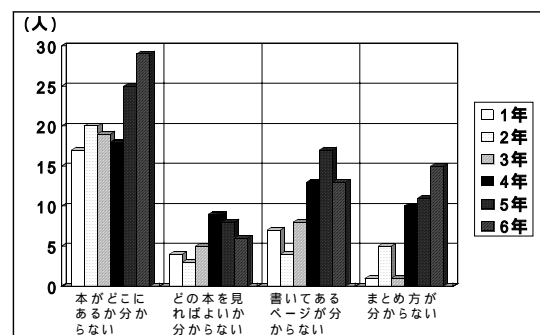
また、教科別では、国語科、社会科、総合的な学習の時間での活用が全体の84%を占め、算数科では全く活用されていない。このことから、段階的な指導は、国語科、社会科、総合的な学習の時間を核としながら、全教科を見通して指導を行うことが可能であると考えられる。算数科で活用されていないことは着目すべきことであり、活用の可能性を探る必要がある。

イ 子供の図書資料活用の現状

子供の図書資料活用に関する現状を把握して、図書資料を活用した授業の視点を探るため、所属校の第1学年～第6学年の児童327人を対象に、アンケート調査を実施した。（実施時期は、平成19年7月）

まず、授業中の図書資料活用場面での子供の意識を知るため、「授業で本を使ったときに困ったこと」についての調査した。「探している本がどこにあるか分からない」という回答が全体の4割近くを占めた。また、「どの本を見ればよいか分からない」「書いてあるページが分からない」「まとめ方が分からない」という回答は、いずれも4年生以上で増加する傾向が見られた（資料4）。

【資料4】図書資料を使ったときに困ったこと

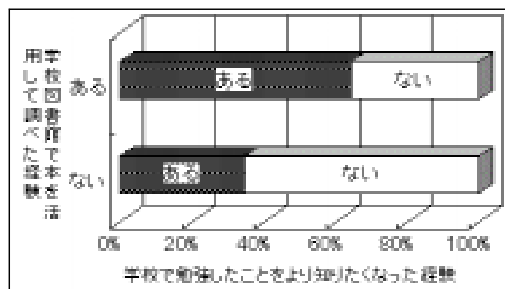


図書資料の活用頻度は、3年生から特に増加することは(2)アの調査で顕著である。

これは、「困った」と感じる子供が増加する時期と一致する。本の探し方や目的の事柄の書いてあるページの見付け方の指導は、子供が必要感を感じる中学年頃から計画的に行う必要がある。具体的には、分類番号の意味、索引や目次の活用の仕方などがある。また、まとめ方の指導では、自分の意見を明確にして相手に分かりやすい文章を書くことが大切である。そこで、低学年から抜き書きなどの経験を積み重ね、中学年では引用の仕方、高学年では要約の仕方を身に付けるとともに、事実と意見を明確にしてまとめる力が身に付くように、計画的な指導をすることが重要である。

次に、学ぶ意欲と課題解決の力の相関関係を明らかにするために、学校図書館で本を活用して調べた経験と、学校で勉強したことをより知りたくなった経験の有無に着目した。その結果、本を活用して調べた経験のある子供は、本を活用して調べた経験のない子供に比べて、勉強したことをより知りたくなる子供が20ポイント以上多いことが分かった（資料5）。

【資料5】学ぶ意欲と課題解決の力の関係



このことから、本で調べる方法を知っていることで、学習したことをより知りたいという気持ちが起こる、あるいは、より知りたいという気持ちが起きたときに本で調べる行動に移すと考えられる。つまり、学ぶ意欲と課題解決の力には相関関係が見られ、相互に高め合うことが効果的であると考えられる。

(3) 検証授業の実施

(1)(2)での考察をもとに、教科等のねらいと関連付けながら、意図的に図書資料を活用することで、研究仮説の情報を収集したり活用したりする力の高まり、学習内容の深まりや広まりについて検証する。そのために、次のように小学校5学級の研究学級を設けて授業を実施した。授業形態は、すべて司書教諭と学級担任のチームティーチング、活動場所は学校図書館である。

実施校	学年	学級	人数	教科	実施年月
所属校	第1学年	2学級	47人	生活科、国語科	平成19年9月
	第4学年	1学級	25人	国語科	平成19年9月
	第6学年	2学級	55人	算数科	平成19年10月

ア 第1学年での実践（生活科「あきをたのしく」）

(ア) 授業仮説

単元の導入で学校図書館を利活用し、図書資料を活用して虫の名前を調べる体験をすることにより、図書資料には新しいことや分からないことを調べる使い方があることを知り、調べる手段として図書資料を活用するようになる。

(イ) 内容

7月の実態調査で、「本で調べる」経験をしたことがある子供は17%である。調べるきっかけ作りをすることで、調べる活動につながることを想定した。

図鑑の使い方を生活科に取り入れた先行研究もある（注3）。しかし、見つけたものの名前を調べる活動は、生活科のねらいからそれて、子供の興味を中断してしまったという課題が挙げられた。生活科においては、調べることで体が目的ではなく、調べることで、活動の意欲につながるようにしなくてはならないと考えた。そこで、単元の導入に活動を位置付け、図書資料から名前を見付ける喜びを味わいながら、調べ方を知ること、生活科の活動への意欲の高まりを支えるものになるように設定した。

本時において、課題を解決する力を高める活動は、虫の本の置いてある書架を知る、虫の本の分類番号を知る、本の中から「虫の名前」を探すとした。

イ 第1学年での実践（国語科「じどう車くらべ」）

（ア）授業仮説

「しごと」と「つくり」を抜き書きするという本時の活動を、生活科での「虫の名前」を抜き書きした活動と関連付けて行うことにより、様々な表現をしている図書資料から、目的に応じて必要な箇所を抜き書きをすることができる。

（イ）内容

国語科では、事前に教科書を活用して3種類の自動車について読み取り、まとめる学習をしている。しかし、教科書の文章が「しごと」と「つくり」を明確に書き表しているのに対して、図書資料は表現の仕方が様々である。そこから必要な事柄を抜き書きするのは、調べる活動に慣れていない子供にとって高度である。そこで、生活科で虫の名前を調べる活動の一週間後に本時を位置付け、関連を図りながら指導することで、段階を踏んで子供の力をはぐくむのではないかと考えた。

本時において、課題を解決する力を高める活動は、図書資料には様々な表現の仕方があることを知る、好きな車に付せんを貼る、図書資料を比べたり写真や絵を参考にしたりして調べたことをまとめるとした。

ウ 第4学年での実践（国語科「『伝え合う』ということ』）

（ア）授業仮説

分類番号を意識して図書資料を探したり、目次や索引を活用して必要な箇所を見付けたりする活動を行うことにより、図書資料を活用した材料収集の仕方を知り、次の学習にも生かすようになる。

（イ）内容

第4学年は、前述の調査のように、学校図書館を利活用する機会が増える一方で、図書資料を使って調べる活動の中で困ったことのある経験が増える時期である。本単元では、全員が図書資料、インターネット、体験を通して、課題解決を図る。本時は、図書資料を活用する2時間のうち、初めの1時間である。そこで、分類番号の意味や目次や索引の活用の仕方などの図書館スキルを教示することで、図書資料の活用方法を学び、調べる活動のときに生かすことができると考えた。

本時において、課題を解決する力を高める活動は、3類について知る、目次

や索引の使い方を知る、必要な箇所を探して抜き書きするとした。

エ 第6学年での実践（算数科「単位量当たりの大きさ」）

(ア) 授業仮説

単位量当たりの大きさを表されているグラフを読み取ったり、表されている内容について考えたりする活動を行うことにより、様々な種類のデータが単位量当たりの大きさを表されていることを知り、単位量当たりの大きさを表すよさに気付く。

(イ) 内容

算数科での図書資料の活用は、前述の調査では実践例がない。単元への位置付けは、発展的な問題を扱う単元最後の「チャレンジ」の時間とした。教科書では、「一人当たりの二酸化炭素の出した量」について表したグラフを読み取る活動が示されている。図書資料には、環境にかかわるものとともに、例えば、「1クラスの生徒数」「1年間の授業時間」「食品の値段」「携帯電話の保有台数」など、子供の生活に身近な様々なテーマが単位量当たりで示されている。これらの活用は、学習と生活を結び付け、学ぶ意欲の向上につながると考えた。

教科等の内容を深めたり、広めたりする活動は、グラフに表された内容を読み比べる、興味のあるグラフを選び、分かったことをまとめる、読み取った内容から自分の考えをまとめるとした。

オ 図書資料活用の観点

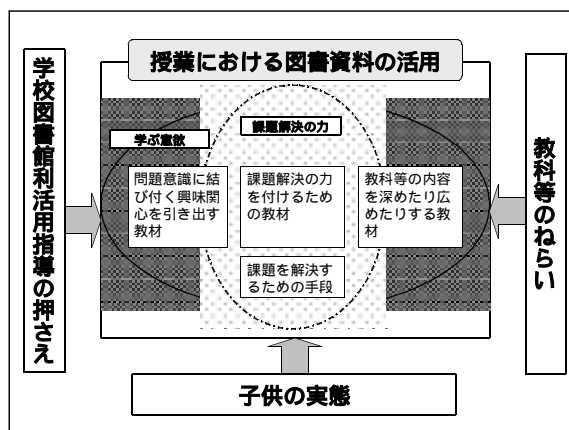
教科等のねらいと学校図書館利活用のねらいの両面から、図書資料の必要性を考える。授業における図書資料には、二つの役割がある（資料6）。教師が意図的に活用する教材としての役割と、子供が課題を解決するための手段としての役割である。

教材として活用するときには、主に教師側が指導のねらいから図書資料の

価値を判断する。そこで、司書教諭と担任（教科等の指導者）による事前打ち合わせでは、図書資料を活用した指導の押さえと教科等のねらいを共通理解する必要がある。それをもとに司書教諭は、担任（教科等の指導者）から子供の実態やこれまでの学習経験を聞き、教科と図書資料の活用のねらいとをすり合わせて選書をする。

一方、課題を解決する手段としての役割を果たすときは、指導のねらいだけではなく、子供の側の必要性も重視する必要がある。具体的には、第4学年の授業において、事前打ち合わせで、司書教諭は単元にかかわりのある図書資料、担任

【資料6】授業における図書資料活用の観点



【資料7】第4学年の授業で活用した図書資料

種類	百科事典	
	3類の本（手話・点字・盲導犬等）	
	伝記	
	絵本	
冊数	学校図書館	16冊
	地域の公共図書館	18冊
	その他の公共図書館	10冊

は子供の立てた学習課題を用意した。打ち合わせを通して、個々の子供の課題に対応するには、図書資料の質と量の不足、子供の課題に対しては、抽象的な表現や問題意識の不明瞭さが挙げられた。そこで、司書教諭は、資源相互貸借システムと静岡県横断検索システム「おうだんくん」を利用してより幅広く図書資料を用意し、担任は子供とともに課題を練り合う時間を設定した（資料7）。

(4) 図書資料の活用が「学びの力」の育成に及ぼす効果の検証

ア 情報を収集したり活用したりする力の高まり

(ア) 調べる活動への動機付け（第1学年での実践）

本時では、虫が載っている箇所を調べ、全員が図書資料に書かれている名前を確認しながら短冊に書くことができた。

そこで、事後調査では、本で調べる活動への意欲の高まりを見ようとした。結果は明確で、生活科、国語科のそれぞれの授業後、分からないことがあったときに「本で調べてみよう」という意欲の高まりが9割以上の子供に見られた。本で調べるよさとして「本で調べたらよく分かる」「知らないものが分かる」「いろいろなことを知ることができる」などが挙げられた。

また、生活科の単元が展開される過程での主体的な図書資料活用状況から、意欲の高まりから調べる活動へのつながりを見た。虫についての本を読んだ子供が60%、虫について調べた子供が43%であった。また、47%の子供が虫以外のことについても図書資料を活用して調べた。調べるための図書資料を探すために、学級文庫や学校図書館のほかに、地域の公共図書館などを利用した子供もあり、主体的な学びへとつながった（資料8）。

つまり、より詳しく知りたいという探求心が起きたときに、図書資料の活用方法を知っていたことで、調べる行動へとつながったと考えられる。また、虫の名前の調べ方を学んだことで、それ以外のものについても同じように調べる活動へとつながった。このことは学んだことを生かそうとする「学びの力」が育っているととらえることができる。単元導入での動機付けは、第1学年の子供にとって効果的であると言える。

【資料8】動機付けによる子供の変容

時期	子供の表れ	人数
7月	本で調べる経験がある子供	8人
生活科授業後	調べる活動への意欲の高まりが見られた子供	43人
国語科授業後	調べる活動への意欲の高まりが見られた子供	42人
11月	虫の本を読んだ子供	28人
11月	虫について本で調べた子供	20人
11月	虫以外（ ）のことを本で調べた子供	22人

・どんぐりの種類
・見つけた葉っぱの種類は何か
・落ち葉での遊び
・木の葉の名前 など

注) 調査対象 所属校第1学年2学級47人

(イ) 図書館スキルの指導（第4学年での実践）

本時では、図書館スキルの中でも、分類番号の意味、目次と索引の活用の方法、言葉を手掛かりにして探す方法を具体的に示した。国語科では、60%の子供が学んだ図書館スキルを活用しながら課題にかかわる箇所を見つけた。また、92%の子供が、学んだ図書館スキルの便利さを感じたり、活用したいという気持ちになったり

したことが、授業後の感想から分かった（資料9）。以上のことから、課題解決のプロセスの中で、具体的に図書館スキルを指導することは、子供への意識付けに効果があると思われる。

また、学んだ図書館スキルをその後の学習に生かすことができたかを見るために、一か月後に行われた社会科の授業と日常生活での図書館スキルの活用状況から追跡調査をした。

まず、社会科での調べる活動では、課題解決の方法を子供自身が選択し、25人中16人の子供が図書資料を活用した。そのうち、図書館スキルを活用した子供は88%であった。また、日常生活では、16人の子供が自主的に図書資料を使って調べる活動をした。そのうち、

図書館スキルを活用した子供は81%であった（資料10）。以上のことから、子供は他教科や日常生活の中でも、図書資料を活用して課題解決をするときに、学んだ図書館スキルを活用することが分かった。つまり、図書館スキルを知っていることで、子供は必要に応じて活用し、課題解決に役立てるとと思われる。

さらに、社会科と日常生活の両方で図書資料を活用して調べる活動をしている子供が10人いた。注目すべき点は、この子供たちは、7月の調査で困っていることに挙げた3項目のいずれも、11月の時点では課題としていないことである。図書館スキルを学ぶことにより、

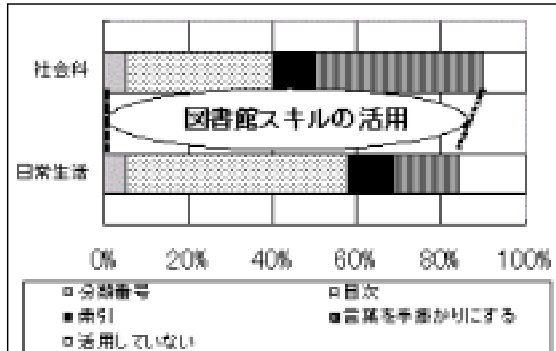
図書資料の活用の仕方に自信を付けたと考えられる（資料11）。

一方、社会科でも日常生活でも図書資料の活用をしていない子供が3人いた。追跡調査の中で、司書教諭に対して、「分類番号をもう一度教えてほしい」、「課題が載っている本を一緒に探してほしい」と支援を求めていることが分かった。この子供たちにとっては、国語科での1時間の授業だけでは、図書資料を活用する力が十分に身に付かなかったと考えられる。時間をかけて繰り返し指導をしたり、別の図書館スキルを指導したりするなど、段階を追って継続的に指導をしていくことで定着が図られると思われる。そのためには、学校図書館を利活用した授業を計画的に行うとともに、個の必要感に応じた個別の支援も行っていくことが大切である。

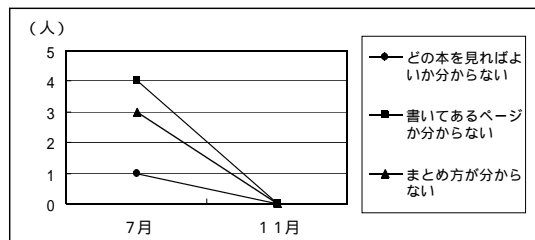
【資料9】授業後の感想（第4学年）

- 分類番号に関すること（10人）
- ・分類番号について分かった。
 - ・他の分類番号もだんだん覚えていきたい。
 - ・番号を覚えて使っていきたい。など
- 目次・索引に関すること（13人）
- ・目次を使うとすぐに見付かるので、これからも最初に目次を見たい。
 - ・目次を参考にすると便利なのが分かった。
 - ・索引を使って調べたことを次に本で調べるときに生かしたい。など

【資料10】図書館スキルの活用



【資料11】図書資料を使ったときに困ったこと



注) 7月の調査とは、(2)イの調査と同じ

(ウ) 個に応じた支援（第4学年での実践）

本時では、自分の課題にかかわる図書資料を25人中24人が見付けることができた。調べた図書資料の冊数は平均5.2冊、そのうち課題にかかわる本は平均1.2冊であった。その中で、本時の1時間では、課題にかかわる本を見付けられなかったA児の表れから、個に応じた支援について考察する。

A児は、1時間の中で14冊の図書資料を調べた。また、分類番号の意味を理解するとともに、目次や索引などを学んだ図書館スキルを活用して自分の力で探そうとする意欲的な取組が見られた。それにもかかわらず、課題にかかわる図書資料を見付けることができなかつたのは、課題解決につながる適切な見出し語が絞れなかつたからではないかと考える。A児の課題は、「どうして手話を作ろうと思ったのか」である。こうした場合、教師が「いつ」「だれが」といった具体的なキーワードを示したり、課題解決に結び付く適切な見出し語への方向付けをしたりすることが大切であると思われる。このような個別の支援を行うことで、目次や索引を効果的に活用でき、課題解決に導くことができるのではないかと考えられる。

(I) まとめ方の指導（第1学年、第6学年での実践）

第1学年では、生活科で「虫の名前」を調べた活動と関連付け、自動車の「しごと」と「つくり」を調べた。調べたい自動車に付せんを貼り、8割の子供が「しごと」と「つくり」の両方を、2割の子供が一方を抜き書きすることができた。「虫の名前」という明確な語句の抜き書きから、段階を追って指導をしたことで、図書資料のどこに書かれているかということ意識して調べることができた。また、必要な情報を抜き書きする際、絵や写真が情報を理解する上で重要な役割を果たした。第1学年では、絵や写真が載っている図書資料や事実が書かれている絵本の活用が効果的と言える。

第6学年では、グループごとに図書資料からグラフを選び、分かったこと（事実）と思ったこと（意見）を区別してまとめるようにした（資料12）。初めに、学級全体で一つのグラフを読み取る活動を行い、事実と意見のまとめ方の違いを確認した。

事実と意見の違いが区別できない子供に対しては、グラフを見ながら違いについて伝えた。一つのグラフから様々な意見が出るとともに、さらに次の疑問へとつながる記述も見られた。統計資料は、事実が明確に記述されていることから、事実と意見の違いを理解させるうえで効果的だと言える。

【資料12】ワークシートの記述（第6学年）

「1リットル当たりのガソリンのねだん」について表されている図書資料を選んだグループ

分かったこと

- ・アメリカは48円。日本は108円。イギリスは155円。

思ったこと

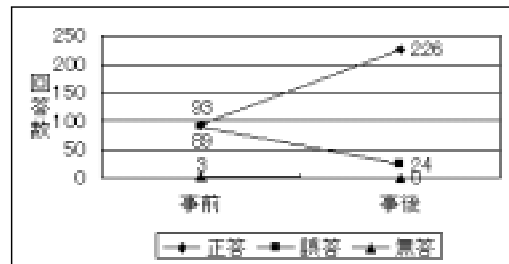
- ・アメリカはどうしてそんなにガソリンが安いのか。
- ・日本もアメリカくらい安くしてほしい。
- ・他の国はどうだろう。
- ・日本はガソリンが高いと思っていたけれど、もっと高い国があった。どうしてこんなに高いのだろう。
- ・アメリカは車に乗る人が多いからだろうか。

イ 学習内容の深まりや広まり（第6学年での実践）

学習内容の深まりを学習内容への理解から見るために、「単体量当たりの大きさで

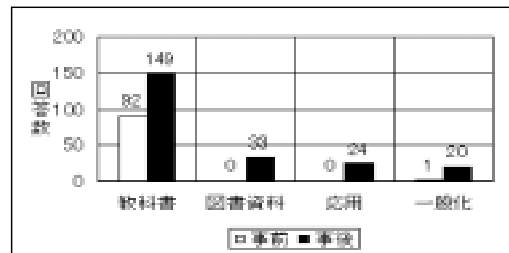
表されるものにはどのようなものがあるか」について事前と事後の記述を比較した。単位量当たりの大きさの具体例が示されたものを正答とした。正答は2.4倍に増加、誤答は4分の1に減少、無答はなくなった(資料13)。

【資料13】事前事後の正答数の変容



また、正答の内訳を見ると、授業で使った図書資料に記述があったものだけではなく、教科書で学習したものや、図書資料の内容を応用して自分自身で考えたと思われるもの、さらに一般化した回答も増えた(資料14)。こうした点から、様々なグラフを読み取ったり、内容について考えたりすることで、単位量当たりの大きさに関する知識が深まるだけでなく、考え方への理解が促されたと思われる。算数のように抽象化した概念の学習の場合、身の回りの事象が表された図書資料を活用することは効果的だと言える。

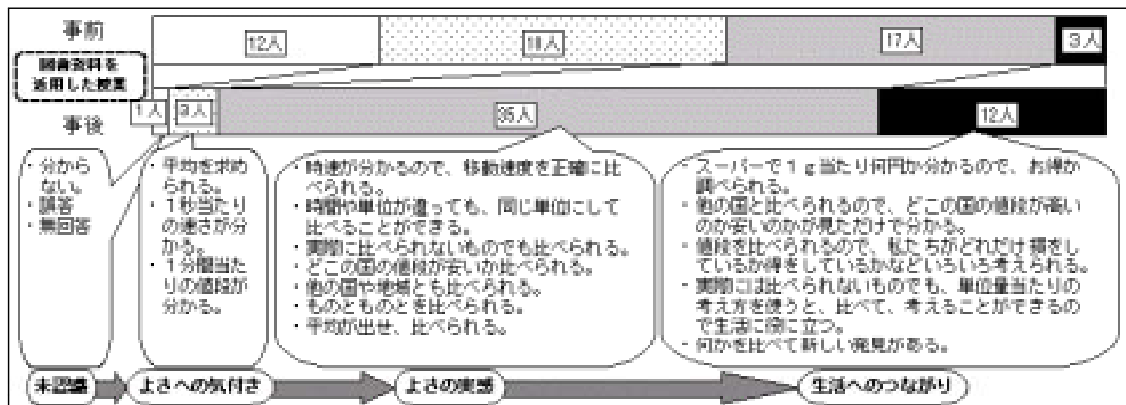
【資料14】正答の内訳



注) 資料13、14の調査対象は所属校第6学年2学級55人、複数回答

「単位量当たりの大きさ」の考え方を扱うよさを認識し、学んだ内容が子供の有用感へとつながることを学習の広まりと押さえ、図書資料を活用した授業の前後でよさに対する認識の差異を比較した(資料15)。事前では、半数の子供が求め方そのものをよさにとらえ(よさへの気付き)、半数の子供が学習した考え方を使えば単位の違う対象でも比べられるよさを実感した(よさの実感)。図書資料を活用した授業により、よさの実感をした子供が倍増した。また、比べることで何ができるかといった実生活へのつながりを読み取れる回答が増えた(生活へのつながり)。さらに、授業後の感想には「単位量当たりの考え方はたくさんのところに使われていた」「他の国とも比べやすかったので、生活の中に使える」とあった。以上のことから、単位量という抽象的な概念が、図書資料の活用により身の回りの具体物と結び付き、子供自身の気付きへの手助けとなり、有用感へとつながったと言える。

【資料15】よさに対する認識からみる学習内容の広まり



5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

課題解決のプロセスに沿って、計画的に授業で学校図書館を利活用し、意図的に図書資料を活用することで、子供の「学びの力」の育成に、次のような効果が見られた。特に、授業後に見られた自主的な学びの姿は、生涯学習につながるものと思われ、大きな成果である。

ア 単元の導入で図書資料の活用の仕方を指導することで、新しいことや疑問に思ったことを調べようとする学ぶ意欲の向上が図られた。

イ 図書資料を活用する図書館スキルの指導は、課題解決のプロセスの中で行うことで、子供は具体的な活用の仕方を知ることができた。そして、次の学習や日常生活の中でも学んだ図書館スキルを活用し、課題解決に生かそうとする姿が見られた。

ウ 算数科での図書資料の活用によって、学習内容への深まりや広まりが見られた。図書資料の活用は、抽象的な概念を子供にとって身近なものに置き換えるときの手段の一つとなることが分かり、学習と日常生活をつなげることができた。

(2) 研究の課題

今後、学校図書館利活用指導を通して、「学びの力」を育成するために、次の3点を課題としてとらえている。

ア 統計資料は、事実の記述が明確で、PISA型「読解力」の育成を図るうえでも、今後効果的な活用が期待できると思われる。教科等のねらいと学校図書館利活用のねらいを考慮に入れ、「学びの力」の育成を図ることができるような図書資料を活用した教材開発をしていきたい。

イ 課題解決の力は、定着や活用に個人差があり、繰り返し指導していくことで身に付いていくと思われた。計画的な指導とともに、個に応じた手だてを考え、どの子供も自信を持って調べる活動に取り組めるように支援していきたい。

ウ 今後、系統的な学校図書館利活用指導を教育活動の中に位置付けていくためには、担任（教科等の指導者）と司書教諭が連携を図るとともに、情報主任や学校図書館サポーターの役割を明確にして、それぞれの役割が校内で円滑に機能していくようにしなくてはならない。そして、全職員が学校図書館利活用指導を意識して取り組むことができるように共通理解を図っていきたい。

注

1) 下山剛編『学習意欲の見方・導き方』, 教育出版, 1985年, 2ページ。

2) 下田好行『「知を活用する力」に着目した教材開発の枠組み - 今、授業実践で何が求められているか - 』国立教育政策研究所 初等中等教育研究部『学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究 - 「活用型・探求型の教育」の教材開発を通して - 研究成果最終報告書』, 2007年, 21 - 28ページ。

3) 袖ヶ浦市立奈良輪小学校「平成13年度研究のまとめ」, 2002年, 18 - 21ページ。

参考にした法令・文献等

- ・『子どもの読書活動の推進に関する法律』, 2001年, 法律第154号 .
- ・『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』, 2002年, 閣議決定 .
- ・『文字・活字文化振興法』, 2005年, 法律第91号 .
- ・堀川照代編『学習指導と学校図書館』樹村房, 2002年 .
- ・堀川照代著「司書教諭は学習指導にどうかかわるか」『学校図書館』第663号, 全国学校図書館協議会, 2006年, 15 - 17ページ .
- ・鎌田和宏著『小学生の情報リテラシー』, 少年写真新聞社, 2007年 .
- ・笠原良郎著『理想の学校図書館をめざそう』, ポプラ社, 2005年 .
- ・澤利政著『学びを豊かにする学校図書館』, 関西学院大学出版会, 2004年 .
- ・関口礼子, 小池源吾, 西岡正子, 鈴木志元, 堀薫夫著『新しい時代の生涯学習』, 有斐閣, 2002年 .
- ・下山剛著『学習意欲の見方・導き方』, 教育出版, 1985年 .
- ・高橋元夫, 堀川照代, 平久江祐司編著「改訂版 学習指導と学校図書館」, 放送大学教育振興会, 2005年 .
- ・鴫田道雄著『学びの力を育てよう メディア活用能力の育成』, ポプラ社, 2005年 .
- ・文部省『小学校学習指導要領解説 国語編』, 東洋館出版, 1999年 .
- ・文部省『小学校学習指導要領解説 算数編』, 東洋館出版, 1999年 .
- ・文部省『小学校学習指導要領解説 生活編』, 日本文教出版, 1999年 .
- ・文部科学省『新しい時代に対応した学校図書館の施設・環境づくり～知と心のメディアセンターとして～』, 文教施設協会, 2001年 .
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』, 東京書籍, 2004年 .
- ・文部科学省『読解力向上に関する資料～PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向～』, 2005年 .
- ・文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』, 2004年 .
- ・言語力育成協力者会議『言語力育成の方策について(報告書案)』, 2007年 .
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryu/07081717/004.htm
2007.11.15)
- ・国立教育政策研究所初等中等教育研究部『学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究 - 「活用型・探求型の教育」の教材開発を通して - 』, 2007年 .
- ・静岡県教育委員会『静岡県子ども読書活動推進計画 - 「読書県しずおか」をめざして - 』, 2004年 .
- ・静岡県生涯学習推進本部『第2次静岡県生涯学習推進計画(マナビプラン2010)』, 2004年 .
- ・袖ヶ浦市教育委員会『袖ヶ浦市小学校学び方ガイド』, 2002年 .
- ・袋井市教育委員会『袋井市子ども読書活動推進計画』, 2007年 .
- ・アメリカ公教育ネットワークアメリカ・スクール・ライブラリアン協会著『インフォメーションパワーが教育を変える! 学校図書館の再生から始まる教育改革』, 高陵社書店, 2003年 .
- ・全国学校図書館協議会, カナダ・アメリカ学校図書館視察団編『カナダ・アメリカに見る学校図書館を中核とする教育の展開』, 全国学校図書館協議会, 2006年 .
- ・視察研修資料 袖ヶ浦市総合教育センター(2007年), 袖ヶ浦市立根形小学校(2007年)
伊東市立西小学校(2007年) .